

村研草創の頃

川 越 淳 二

「きみーい、むらの研究やっているんだろう。一緒にやろうじゃ

ないか」。ボンと肩をたたかれて振り返ると、白髪童顔の大先生がこちらをむいてニコッと笑った。たしか、一九五二年一〇月二六日、二五回社会学会大会の二日目、東大山上会議所での懇親会の席上であったとおもう。当時の私はほんのかけだしで、特別の指導者もなしに、まったく我流で鈴木・喜多野「農村社会調査法」を手引きにしながら、岐阜県美濃地方のいわゆる輪中地域を調査していた頃である。学会での口頭報告も五つ、書いたものもわずか三篇に過ぎなかった。恩師や先輩のご推薦によるものと思うが、こう直接大先生から声をかけられると、まったく恐懼感激の態であった。「はあ」。「じゃあ、発起人に加えるからね」。こういわれておもわず「よろしく願います」と答えてから、急に不安になった。「一体、大先生と一緒にやっていると答えてから、急に不安になった。「もいえない嬉しさがこみあげてきた。「これでいろいろ教えて頂ける」と。これが発足当時の村研と私とのかかわりあいであった。それから翌年二月まで三回の打合せ会のご連絡を頂いたが、これは欠席した。新幹線はまだ開通せず、上京するには往復夜行によらなければならなかったし、発起人として出席するのが気恥しいこともあった。だから正式の出席は一九五三年一〇月の第一回の仙台大会まで待たなければならなかった。それまで六回「研究通信」が送られてきた。最初は殆んど読めないような手刷の「通信」だったが、隅から隅までくり返えして読んだ。そして大会の日を、子供のように、待ちに待った。

東北大農研の第一回大会での報告は、残念ながら殆んど記憶がな

い。ただ熱気でムンムンした共同討論が終っても、誰一人退席しようとするものがなかったこと、そのために閉会の辞もなかったこと、皆一様に去り難い気持で一杯だったことだけが記憶に残っている。こんな感激はそれ以前もそれ以後もない。懇親会の記憶もないが、上り終列車を待って駅前の一杯呑屋で、有賀、中村、竹内の諸先生と一刻を過したことだけが妙に頭に残っている。これが本当に研究者の集りなのだ。これに一生を托してみよう。そんな気持で一杯であった。

村研への慕情はつるばかりであったが、地理的な関係や旅費の都合で毎回の研究会や打合せ会には全く出席できなかった。

翌年一〇月教育大学で開かれた第二回大会には大きな期待を持って出席した。しかし正直に言って希望は果されなかった。これは一年間の研究会に出席できなかったためからくる「共同討論」への参加の困難さと「もどかしさ」、第一回大会にみられたあの熱気がここでは感ぜられなかったためであろう。大会後の協議会に出席しながらも、そこでの論議があまりに「アップ・ツウ・デイト」すぎると感じないわけにいかなかった。そのためもあって、大阪での第三回大会は、前々日に社会学会大会が九人で開かれたあとを九州流行に費やして、欠席した。しかしその後送られてきた「通信」や共同討論の記録を読んで出席しなかったことを悔むと同時に、村研にたいする私の姿勢がいい加減なものであったことを反省させられた。とくに殆んど毎号のせられる有賀先生の記事に深く心をうたれた。肩を叩いて勧められたときの感激をもう忘れたのか、と自らを諫め

たりした。

第四回、第五回と、大会には真面目に出席し、報告に耳を傾け、討論に参加し、求められれば「通信」に原稿を送り、私なりに努力をした。しかし、いま「通信」の復刻版を読み返してみると、やはり地方在住者としての私なりの不満や希望がのべられている。同志的結合といわれた村研の、いわばインフォーマルな討論の場が欲しかった。そこでこそかみしもを脱いだ本当の討論と勉強ができるとおもったからである。

いまでは慣例になっている「宿泊による大会」が念願であった。「通信」にもその希望をのべた投稿をした。この提案は在京の方々の真剣な検討と会員の意見の集約という順序を踏んで、ついに第六回大会が、いまでも想い出話となる鳴子温泉での宿泊大会として実現した。そこではじめて期待されたインフォーマルな討論、というか、調査研究の裏話をじっくりうかがうことができた。「村研はよみがえった」。多分そう感じたのは私だけではなかったと思う。

発足以来、四分の一世紀近くなった。同志的結合の節となった「通信」も一〇〇号を算えることとなった。新しい会員も増え、その将来は期待されているが、いま一度、「農研」や「鳴子」での感激を味ってみたい。これが発足当時からあまり有能でない一會員の偽わらざるいまの感想である。